

がん化学療法科 ニュースレター 一周年記念号



## ほほえみ 第13号

ニュースレター発刊から、あっという間に一年が経ちました。皆様、今年一年はどんな年だったでしょうか。一年を振り返るといって、ニュースのダイジェスト的なことを思い浮かべてしまいがちですが、本当に重要なことは、自分の人生にとってどんな一年であったかではないでしょうか。そして、今日やるべきことを考える、結局何かを成すなら、現在・現時点でしか行えないのが人間だとも言えるでしょう。

### 視点

秋田大学臨床腫瘍学 柴田浩行

岩手県立中央病院の化学療法科を訪れるようになって2年になろうとしています。科長の加藤先生から旬報に寄稿の依頼を受けて久しく果たせませんでした。ようやく遅い筆をとっています。

私は尾張名古屋の産で大学から仙台に暮らし、2009年の2月に新設された秋田大学臨床腫瘍学講座に移りました。途中、不在の期間もありましたが、25年近くを仙台で過ごしました。

かつて西日本から見た東北地方は、ご想像の通りの印象でしたが、夏期講習で聞いた仙台一高対二高のバンカラな定期戦など、杜の都に魅力を感じて移ってきました。しかし、仙台も名古屋も、同じ太平洋岸であるのに対し、秋田は日本海に面する裏日本。2度目の東郷ターン(180度回頭)である秋田行きでは正直に申し上げて、大いに寂寥感を感じました。日本海の向こうは、もう北朝鮮、ロシアなど、かつての、そして現在の(?)敵性国です。折しも秋田に移住早々、テポドンが上空を通過し、自衛隊の迎撃用のミサイル車両が秋田に配備される事件などもあり、辺境に来た感を深めました。

現在、多い月で数度の東京への出張がありますが、日帰りも多く、かつての飛行機アレルギーも最早、新幹線には乗ってられません。機内で空路を示す日本地図をよく見るのですが、或る時、上下を逆さまに手に取ると日本海が内海をなし、日本列島がその外周を形成する常とは異なる印象に新鮮な感覚を抱きました。北朝鮮やロシアなどとの関係性が良かったら、また良くなれば日本海を中心とした発展があるはず。日本海岸には江戸時代の豪商が数多く存在しますが、かつては「どうして、こんな所に」と思ったものですが、京上方との日本海交易は円弧の内周を通るので距離的にも有利だった訳です。

少しずつ秋田の生活にも馴染んできたのですが、子供たちの適応はもっと早いようです。娘には、色々似てほしくない所もありますが、彼女の「歴史」は親父譲りです。私の英雄は織田信長ですが、娘は郷土の英雄「佐竹義宣」です。佐竹氏は関ヶ原の陣において常陸の国で日和見の態度に終始し、戦後、徳川氏によって五十万石の大封から出羽久保田二十万石に減封されます。佐竹氏は八幡太郎義家の弟、新羅三郎義光を先祖に抱く清和源氏の名門ですが、一方の徳川氏は源氏に所縁の征夷大将軍に任じられてはいるものの、先祖は時宗の遊行僧で、その故地は愛知県三河九久平という矢作川の上流、山肌へばりついた寒村です。ここは私の親父の故郷でもあり、子供の頃から何度も訪ねていますが、実に鄙びた所です。由緒正しい佐竹氏は源氏を詐称する親戚よって転封の憂き目にあいますが、幕末に復仇します。戊辰の役では奥羽列藩は新政府軍と交戦しますが、佐竹氏は官軍につきま。奥羽列藩の盟主、伊達氏の誘いを拒絶し、その外交団を斬殺しています。過日、奈良平安の昔に蝦夷との国境に設けられた秋田城を散策中、偶然「仙台藩士受難の碑」を見つけ、歴史の裏側を垣間みました。維新後に佐竹氏は侯爵に叙せられます。華族の爵位は「公—侯—伯—子—男」の順ですが、公爵は徳川宗家、薩摩藩主、長州藩主などわずかで、尾張家はじめ徳川御三家でも佐竹と同じ侯爵、薩長と並び称される西南雄藩の土佐や肥前藩主も侯爵です。仙台伊達家をはじめ奥羽列藩はせいぜい伯爵止まりで、因みに南部の殿様も伯爵です。秋田には仙台に対するライバル意識が強いと聞きましたが、この辺にも遠因があるのかもしれませんが。視点を変えると意外な発見があります。



佐竹義宣(ウィキペディアより引用)

(次ページへ続く)

ご存知のように、先日、「新渡戸稲造記念がん哲学外来」が院内で開催されました。旧知の順天堂大学病理学教授、樋野先生の有名な企画です。私の知る患者さんが二組受診され、私も見学しました。私たちは医療提供者として患者さんのことは、それなりに知っているように思っていたのですが、それはとんでもない思い違いでした。どのような気持ちで日々を送られているのか、どのような考えを持っておられるのかなど、樋野先生との会話の中から私の知らない人物像が浮かび上がってきました。私たちは、自分の考えを患者さんに押しつけていないか、患者さんの視点を理解することも重要だと知らされました。私は医学生を教育する立場でもあり、また、がん薬物療法の専門医を養成する立場で専門医養成のカリキュラムの改訂をやっていますが、その中に「文化能力」という項があります。専門医は「がん患者への医療提供において文化が持つ重要性について知る。患者や家族の文化的な価値観を尊重した話し合いができる。」必要があります。「患者さんの価値観を尊重した話し合い」というのは実はできていないのではないかと感じました。医療の提供者と受益者である患者は本質的に利害関係に立つと考えてきました。故に、がん哲学外来は“暇げな病理医”ではない我々医療提供者には実践困難だと樋野先生に反論したこともあります。依然としてがん治療は難しく、現状では患者さんに十分な満足を提供できない可能性もあり、自身そのことへの潜在的な憚りもあってか、むしろ、そのために権威的な態度になったりしていないかと考えさせられました。患者の利益を忠実に守り、常に成果を求められる医療提供者はその重圧に燃え尽きてしまうこともあります。しかし、医療提供者と患者の関係は本当にそれだけなのか。利害関係という極めて直裁的な関係から、それを越えた人間関係があっても良いと。そのためには、私たちも時に視点を変えてみる必要があります。今まで見えなかったものが見えてくる可能性、がん哲学外来では私自身大いに考えさせられました。まさに、哲学の面目躍如です。一方、大学という研究機関では、がんの征圧を目指して新たな治療法の開発を行っています。まだまだ患者さんに提供できる段階ではないのですが、なんとか現状を改善できないかと日々努力をしています。これは、また別の視点に立った仕事であり、いずれお話しする機会があればと思います。

## 一年を振り返って



ニュースレターを発行してから一年が経過しますが、毎月ニュースレターを発行するのが、非常に大変だということがわかりました。何か考えを書くこと、それを続けることは、修練としては非常に有意義ではあると思いますが、途切れず、続けて来られたのは、何人かのニュースレターを楽しみにされている方があったからだと思います。拙い文章ではありましたが、読んでいただいた方々には、この場を借りて御礼申し上げます。

2011年の前半ではチーム医療からリーダーシップやマネジメントについて考える機会が多かったですし、これは東日本大震災という未曾有の災害で、限られた条件の中で医療を展開していくといった状況に直面し、多少は有効に働いたと思います。後半は、樋野興夫先生という、たぐい稀な見識を持った人物の行動、発想を間近で感じる事ができた事で、何を我々が実践すれば良いのか啓示をいただいたと思います。樋野先生にとっては迷惑かもしれませんが、勝手に弟子と名乗って学び続けたいと思っています。

チーム医療、がん哲学外来など、まずスタートさせる段階の一年であり、まず自分で試みてみるという段階にあったと思います。佐々木院長を始め、新たな試みに対し、温かく見守っていただいたということもありますし、実際の場面では、いろいろな人に、無理やり手伝ってもらったことも多いのですが、方向性が間違っていなければ、いつかは手伝っていただいた方にとっても、プラスの価値が出てくるものと確信しています。

これからも、がん化学療法に軸足を置きつつ、今試みられている「がん医療」の良いところを取り入れて、診療を行っていきたいと考えておりますので、長い目で見ていただければと存じます。

末筆ながら、2012年の、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

## MEMO

### 12月のがん化学療法科の予定

|        |             |
|--------|-------------|
| 12月9日  | 柴田教授外来      |
| 12月23日 | 天皇誕生日       |
| 12月25日 | クリスマス       |
| 12月28日 | 仕事納め        |
| 12月30日 | 外来化学療法を行います |



新渡戸稲造記念 メディカル・カフェを本格的に開始します(後日、掲示します。)